

特集

中学校における特別支援教育の展望

特集にあたって

生き方を探る3年間に伴走するために

奥住 秀之

おくすみ ひでゆき
東京学芸大学、本誌編集委員

中学生の時期は思春期という、子どもから大人への過渡期である青年期の初期にあたる。第二次反抗期とも呼ばれ、第一次反抗期が特定の身近な大人に向けた反抗であるのに対し、より一般的、社会的な権威や権力にその反抗が向かう時期と言われる。ルソーが、人として生まれる最初の誕生と対比させて、自己を形成するための「第二の誕生」と呼んだことはあまりに有名だろう。

また、この時期を科学的認識の開始とみることもできる。たとえば、吉野源三郎による『君たちはどう生きるか』の中学生の主人公・コペル君は、デパート屋上から見下ろす人や車を、それぞれ独立した単位ではなく、連関し生成発展する分子運動として捉えてみせた。一つの社会科学的認識の萌芽とみることができるのではないか。ラッセル・アインシュタイン宣言で著名なバートランド・ラッセルが、その著書『教育論』で、「十四歳になれば、生徒の趣味と適性に応じて、教育は多かれ少なかれ専門化し始めてもよい」と記述しているが、この時期に認識の発達段階や学習内容がより高次に向かうことがここからも示唆される。

第二次性徴期として身体的側面は大人に近づく一方で、精神的側面は未成熟のままの子どもでも大人でもない状態にあり、自己の発見に悩み、自分は何者かと自己に問いかけ、他者と自己の比較の間に生ずる葛藤と向き合い乗り越えながらアイデンティティを形成していく段階とまとめられるだろう。

特別支援教育の開始にあたって、「小・中学校における発達障害児とその支援」などのように、小学校と中学校が「同等・並列・同時」に扱われる場面をたびたび目にしてきた。もちろん両者を貫く原則はあるだろうが、中学校段階に特徴的な特別支援教育の課題や発達障害支援の視点も少なくないのではないだろうか。

例を挙げれば、教科学習は小学校までの基礎・基本を土台にして、より専門的な内容へと発展し、それに伴い教科担任制が開始される。発達障害のある生徒にとって、教科学習の難易度が一挙に上昇するという課題とともに、小学校のときのように登校から下校まで一貫して自分のことを見てくれる教師が不在となる。他方で、多様な教科担任あるいは部活動顧問などに出会う機会が広がることで、心許せる教師と巡りあえるチャンスが逆に増えるのではないかと前向きに捉えることもできるのかもしれない。

中学校教育には固有の難しさがある。しかしそれは、いじめや不登校などが多発しているという現象面での困難ではない。人間の誰もが通る発達のプロセスで生じる葛藤と直接的に向き合う教育に由来する困難である。本特集は、中学校の特別支援教育はこうした中学校教育の本質を問うことなしには前進しないと考え、これまでの中学生と中学校教育に関する実践・研究を十分に踏まえて企画した。

今号が、中学校教育とそこでの特別支援教育双方が関わりあいながら発展する契機となれば幸いである。